仏教思想史に視る現代社会への対論と試論

別所衣子

仏教史と一口に言っても、独立的性質を有しているものではなく、又、各個に存在することもないのであるから、思想史となれば、絶対主義であり、特に、仏教史は、内的観により、その思想史は、絶対的唯心論によって、認識されている。

総括して、現代社会への外的及び、内的関係を説くなら、諸説の論理は、批判的、実在論であり、在立する事自体、「命題」である。

古代より、現代に至る迄、我々、人間を、包容し得るに足る仏教思想は、主観的認識の上に立ち、伝統的自意識であり、定義してかかる立論は誤算であり、分析して、考察するのを要する、思弁的な観念であるのだから、不当な重んじ方のみで、根本的、命題を立てるべきではない。

仮定し得る世界は、いわば、多元的に集って、普遍化し、非時間的と言わず、永遠というように、最初から、その頭字を、「真理」とか、「絶対」とは、言っていないので、あって、思考の法則として、論理が、思考に従い、思考作用、そのもののが、所有している法則ではない。

即ち、「知る」法則と、「在る」という法則とは別であり、その論点の覚る自意識は、一つの事物が、一人の句に、関係し、認めさせようとする立論の成見である。

仏教思想史中、根本仏教は、仏陀と、並にその弟子の時代からの仏教であるから、原始時代の仏教思想は、（紀元前三五〇年―二七〇年）は、伝承維持が、教権確立になったといってもいい。草稿も、筆記も、速記もなかったのであるから、唯聴者による結集の綱目化をなした教説であり、仏語は蒐集することによって、補足されつつ、学説的には、実在論の立場をとり、思想は各人相互に一致せず、上座長老の形式化で、転変説は、広意の宇宙論であった。

縁起説も、事実的に見られ、従って、志然的に、時間的因果関係で解されることとなる。

即ち、縁起とは、縁に起る過程を示す意味となるので、原因結果の関係で見る時は、識の生ずる以前に、すでに、現在の生存の存する理由はないのであるから、識が、現在生存の最初となる。

それ等と同様に、思弁的独断的に、唯一の経験に照し合せて、立論せずに、最初から、成見をもって定義したのが、立論の誤算であると思わなければならない。

哲学的には、包容し、広範に、普遍化して説明を求める事が出来ても、仮定として、先づ、仮定の世界は、統一の出来た世界ではなく、あらゆるものが多元的に集って、出来た世界と見るべきなのである。

いわば、多元的に集って出来た世界と、見るべきであるから、言葉の暗示から生ずる、誤算は、かなりある。

非時間的というかわりに、永遠的といい、最後の項のない系列を無限と言い、頭字を、大にして、「真理」とか、「絶対」というのは唯心論者にある不当な誤算と、みなければならない。

そこで、現代社会に於ける「存在」論の「在」は、異ってくる。

「在る」ということは、仏教史上に於ては、知られることであり、知られる事の重点に、更に、認識作用が、事物を決定づけるように見えるのは、いわゆる観念論者が、陥るところの誤算なのである。

即ち、世界の在る法則で、知る作用の従うべき法則でなのであり、認識論は、語るべき問題ではなく、事実の法則として、取扱うべき学問であるという事になるから、論理学と実在論の相違が、ここに生ずるのである。

知覚にしても、幻覚にしても、同じことがいえる。コーヒー茶碗は、存在すると思う。ペンは、存在すると思う。ペンを見るから、ペンが存在するので、コーヒー茶碗を、日本風茶器と見れば、コーヒー茶碗は、そこに、存在しないこととなる。

つまり、時に、錯覚ともなり、幻覚であることがいえる。

即ち、我々の知覚表象は、常に、存在的に、「真」である。

これ等は、空想的相像ではなく、「相像」しただけで、間違えている場合があるという事であるから、相像することは、空想的な相像ではなく、願う、念うにかかわらず、自然に起る相像である。

ペンも、茶碗も、「知覚」で、ペンなら、ペンの知覚で相像したことになるのである。

これが、外的事物の存在であるところの、実用論的方法に於て解決出来る、心的状態、についての感覚である。

では、仏教思想史たるもの、現代社会へ、何を露呈してきただろうかという、問題点に突き当る。重要なのは、論証より、教儀より、又、仏説より、訳されてきている経典という訳書であって、多大の答論は、述記よりも、その要旨のみでも、経典を訳せばよい。

対論は、論理的な思考に基づいているのであって、主題の展開は、対論は、存在しないといっても、いいのである。

したがって、思想史的な、基盤の思想立脚点は、いづれの教理にしても、試論であるといわざるを得ない。

そのいい例が「即身成仏思想」であって、宗論の対決となれば、事例は、少くない対論とは、なるが、論理化は、それを更に、具体的な事物をもって、発展しなければ、対論という課題は、思想性を検討し、現代思想への展開は、とげることは出来ないので、「対論」にあらず「試論」と、筆者は、言ったのである。合成語の解釈。論述は、紙数が、つきないので、はぶかせていただき、換言すれば、現代社会は、分別的思惟を超え、対象として、知の実践主義でなければならないからであって、認識主体、それ自体、世俗が説定出来ても、その在り方については、世俗真理の範囲は、日常的営為に、重点が、おかれ、業論とは、結びつかないのである。が、しかし、識の相互は、縁起説との対比を有するのであって、この仏説を、現代にまで、いたらしめたのは、「世親」である。「空性、無相、無願」等、句義の説明は、経中に、如来蔵説を、清弁となした大乗内部での仏陀の説示による人格であり、基礎や真偽は、仏教思想史の発展に伴い、人間の自由意志に基づく運動の意義であり、原流である。

仏教思想史という、独自の見識ではなく、仏教思想を現実化することによって、弁証法は、成立し、個別的に、認識論は、現代に於て、概念でなく、試論の原形となるのである。

（完）